

おのきた

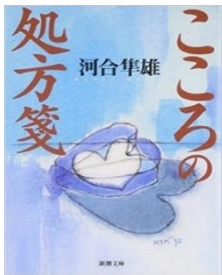
尾北校長室から

第28号



100点満点? ~ 二兎を追う

第一中間試験も終わり、答案用紙が返ってきた頃と思う。さあ、結果はどうだっただろうか？ 100点満点がとれた人は、そうそういるものではない。ところが、臨床心理学者の河合隼雄氏(1928-2007)が著した「**こころの処方箋**」(新潮文庫)という小エッセイ集の中には、「**100点以外はダメなときがある**」という一章がある。少し長いが、次に一部を引用して紹介したい。



「人生にも、**こころというとき**がある。それはそれほど回数が多いものではない。とすると、そのときに準備も十分にせず、覚悟も決めずに挑むのは、全く馬鹿げている。ところが、案外、そのようなときでも90点も取ればよかろう、という態度で臨む人が多いように思われる。このような人が、自分はいつも努力しているのに、運が悪いと嘆くのは、ことの道理がわかっていないと言うべきであろう。」

一般的には、100点満点であれば、70点ぐらいで一定の基準をクリアした、あるいは合格とみなされる場合も多い。しかし、河合氏の言う「100点」とは、単に試験における得点だけではなく、その人が直面する「こころというとき」の、物事に対する姿勢のことを言っている。「**これ以上頑張れない。**」という**全力**をかけてその人が取組んだかどうか、単に結果としての点数ではなく、大げさに言えば、その人の「生き方」そのものを問うているのである。



「二兎を追う者は一兎も得ず」——同時に二つのことをやろうとすると、どちらも失敗することになりかねないから、一つに集中することを教える言葉である。確かに当てはまる場合も多いだろう。しかしながら、北高生にはあえて「**二兎**」を追ってほしいと思っている。そのためには、万人に等しく与えられている時間の使い方——中身の濃い時間——を工夫しなければならない。

100%を**あんぶん**按分して一方に70%、もう一方に30%を振り分けるのではなく、両方に100%である。「勉強も部活も」両方とも全力である。**量の変化は、やがて質の変化を伴う**ようになる。例えば、川の流れは幅が狭くなったところでは自ずと急流になるように、何事もあえて**時間を限る中でスピード感**が増し、同じものも次第に**効率よく**できるようになる。大切なことは、自分なりのやり方を工夫する熱意と、100% (=現状) を超えようとする強い姿勢である。

何事にも全力を尽くせ！ そうするとやがて来る結果に対し、うまくいかなかったなら少し時間はかかるかもしれないが、その結果をも受け入れることができるようになる。その経験は、君たちの人生に、必ずや糧^{かて}となって積み重なっていくはずである。

「**二兎を追う者こそが、二兎を得ることができる。**」北高生よ。迷わず二兎を追え！ 高校時代は、進路選択の分岐点。今こそ「こころというとき」ではないか？！